

### 仲宗根政善先生

大見, 祥子 / OOMI, Sachiko

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

47

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002706>

## 仲宗根政善先生

大見祥子

仲宗根先生と一高女の生徒二、三人が前線突破して国頭に行くとは出発した。又佐和田、下地さん達も前線突破しようと言いついと、下級生達は「前線突破しよう、前線突破しよう」、「此処にいては敵に撃たれるか、飢え死するしかない。いきましよう、いきましよう」と主張した。先生は「自分はとても貴女方をつれて前線突破する気力はない自分の体さえもてるかどうかわからない。貴女方を世話することは出来ないから四・五人組をくんで前線突破しなさい。」とおっしゃった。皆前線突破しよう、するんだといきり立った。先生は解散命令が出て伊原第一外科壕を出て間もなく首に被弾なされ耳も遠くなり、其の上お腹もこわされ随分痩せておられた。日頃から尊敬している先生ですので、仲宗根先生と一緒に死ねたら本望だと思った。「私は行かないよ。貴女達と一緒に前線突破したらよいでしょう。」と言つと上級生が行かなければと、とりやめになった。

夕方仲宗根先生はとても駄目だと帰つてこられた。生徒も突破は出来ないと言つて来た。仲宗根先生は、「皆失敗して帰ってくるから、女師一高女の生徒は一かたまりになって、岩に自分の名前を刻

んでから死のう、そうすれば姫百合の名は世の限り伝えられるであろう。」と、私は美しい夢を描いて嬉しかった喜んで死ねると思った。

仲間幸子、当山美さんがずぶぬれになって来た。海にはいつて突破しようとしたが駄目だと言っていた。

あまり水が欲しいので村田俊子さんと飯盒を持って、海岸の岩のくぼみにたまった塩気の多い水を汲んだ。落ちていた豆を拾い集めた。海で浴びている兵隊もいた。海岸で平気で煙を出して御飯を炊いている人もいた。今日が最後になるかも知れないからおおめに御飯を炊こうと話し合って、皆から米を集めて一人二個宛作った。拾った豆も煎った。

夕ご飯はアダンのかげから出て岩の上で食べる事になり、仲宗根先生も御一緒に見はらしのよい岩の上に輪になって座った。月も上っていた。幾日振りであったでしょう。おにぎり二つも戴けたのは十三人は月に向かって「海ゆかば」、「校歌」、「別れの曲<sup>うた</sup>」を合唱し、田場其枝さんの独唱も聞いた。歌い疲れたみんなは月に向かっておし黙った。皇国の勝利を見ないで死ぬのは口惜しい、せめてふるさと国頭の清い真水を飲んでから死にたいと思った。しばらく皆月を眺めながらそれぞれの思いにふけていた。その晩もアダンのかげで寝た。

明けて二十三日は至って静かだった。たまたま小銃の音がピューン。ピューンと聞こえるだけだった。二、三人の兵隊が前線突破するに行ったあとは人気のない静かさだった。

正午頃ジャングルのすぐ側でザワザワ人声がしたかと思うと「パン。」とピストルの音がした。出て見ると仰向きになった兵隊が額から血がたらたらとこめかみに流れている。側には二人の兵隊が立っていた。「さとうきびを取りに行ってお腹をやられたんだ。治療する所もないし、どうせ助からないから頼まれたからやったんだ。」と言っていた。幾度も深呼吸をしている。「とても苦しそうですね。」と言うと、「本人はもう意識はないです。」他の人が「かわいそうだからもう一ぱつ撃ってやろう、さあ耳をおおて。」と言って銃先をこめかみに当て撃った。又血が流れた。息は同じ調子で喘いでいた。二人は顔の血を拭いてやり、紺地の女ものの着物を頭から足までおおて去っていった。胸の上の着物の模様が波打っていた。

搭乗員の姿がはっきり見える程低空して偵察機が飛んで来たが、うたなかった。

喜屋武の岬に泉があるというのを聞いていたので、村田俊子さんと二人飯盒を持って真水を探したが、なかなか見つからないので仕方なく岩のくぼみのたまり水を入れて帰って来ると、右手の方が見た事のない白い鉄製の細長い棒みたいなものを頭上に立てて、将校らしい兵隊が立っている。周囲には十四、五人の兵隊がとりまいている。どうも様子がおかしい、鉄かぶとが日本軍とは違う。「今は親切な事を言っているのだ。煙草がないからむこうへ行ってあげよう。」と言っているんだ。初めてアメリカ兵と気づき早く、皆に知らせなくちゃとジャングルの中にはいろうとすると、何と反対方向から、四、五十人のアメリカ兵が銃を持って近づいて来た。ジャングルの中にはいるかはいらぬ中

に、「出て来なさい。出て来なさい。」と言っている。もう最後だと思って手榴弾を持って岩の上に腰掛けた。福地キヨさんも手榴弾を持って立っていた。そして今にも栓を抜こうと身がまえた。下級生の身体がふるえているのを見ると、栓を抜くのを躊躇された。その時先生が「今死ぬんでないぞ！福地、センを抜くな！」とどなられた。皆はジャングルの外へ出ていった。「俊ちゃん早く出て来なさい。」「福地！。」「久田！。」と幾度も呼んでいる。とうとう手榴弾を阿旦の側に置いて出ていった。至近弾で耳を負傷しておられた先生はアメリカ兵と筆談をしておられた。「先生何と言っているんですか。」「水や食物を与えるとやっている。」と言われた。「先生何時死んですか。」「死ぬのは待て、死のうと思えば、機会はいくらでもある。私がよしと言ったら海へでも飛びこむんだな、合図をするから。」と言われた。兵隊民間の人々四、五十人アメリカ兵が前後左右からついて、少しばかり廣場の芝生のある所へ出た時、一人の兵隊がパーンと自決をした。同時に今までのんきに構えていたアメリカ兵の銃口が一斉に自決した兵隊へ向けられた。廣場での自決のパーンとしめし合わせたようにパーンパーンと十個位の手榴弾の音が海岸の波打際で聞えた。今度は銃口を海岸へ向けた。その時裸になって両手を挙げて来る男の人がいたがアメリカ兵は撃たなかった。先生は兵隊に間違えられ背中に銃をつきつけられた。私達は驚いて「先生服を脱げと言っているんですよ。」今にも引きがねをぬかんばかりのアメリカ兵をにらみ返しながら手伝った。そして先生と私達は別々に収容された。

(後日運天祐子さんも先生が銃口をつきつけられた時、そばに立っているアメリカ兵につめよった。

すると十字架を示されたのでほっとしたと話していた。

戦後石川に諮詢会があった頃、仲宗根先生が石川におられる事を聞いてお宅に伺った。挨拶をすませたら先生は奥の方の台の上に置かれた白木の箱の方へ向われ、「お友達の遺骨だ手を合わせなさい。」と言われた。喜屋武のジャングルのそばでアメリカ兵に別々に収容されて以来初めてお逢いするので、なつかしさ嬉しさで胸が一杯だったのに、私はあまりにも思いがけないお言葉や情景でびっくりしてどうしていいかわからなかった。総べてを破壊され焼き盡されて、やっと御家族と御一緒にテント小屋に住めるようになって、まだ食べるものも不十分のあの時代に教え子の遺骨を御自分の部屋に安置され供養されているお姿は、ありがたく尊く、亡くなった友達もあの世できっと喜んでいるだろう、幸せだと思った。先生が真和志村に移転されて後お宅に伺った時、隣の真照寺に安置してあると話された。

六月二十三日の毎年の慰霊祭の時、仲宗根先生の弔辞はお亡くなりになった先生や学友へのことばですが、聞いている中に私は、同じ弾で重傷を負った友を南風原の壕に残して来た事の自責の念の苦しみも癒やされ、自分の心が安定していくのを感じた。晩年お身体を悪くされ、御出席出来なくなつた時は非常に淋しい思いをした。

①仲宗根先生と一緒に米兵に収容された私達の事を常に心にとめられ、先生に声をかけられて、テレビに出たり、報道関係の取材に応ずる事が多かった。最初は昭和四十四、五年頃でTBSの全国放

映であった。八重山の当山美さんと初めて逢うという設定で放映された。生れて始めてテレビに出るのでとても緊張したが先生が御一緒だったので安心して取材に応じることが出来た。②昭和五十八年頃木村伊兵衛賞を受賞したカメラマン平良孝七氏を紹介された。喜屋武の岬で仲宗根先生と一緒にいた、あのメンバーで皆揃ってもう一度行ってみたいと運天祐子さんが提案したので、先生の計らいで希望がかえられた。行く途中清和病院に勤務していた村田俊子を、先生は、「私が暇をもらって来よう。」と勤務中の村田俊子さんを誘われた。八重山、北部、中部、那覇から集まった八人は。十米先の地名もわからない所を米兵に追われながらさまよった、伊原、喜屋武の岬をたどって、先生と一緒に戦争中の事をその場で話し合うことが出来た。平良孝七氏が東辺名あたりの部落に来た時、沖繩戦で一家全滅で位牌だけを安置してあるコンクリート建ての無人家を、ここにもそこにもと指差して説明された。③昭和六十年にも全国放映でした。その時先生は始めて杖をつかれた。二月の寒い時で奥様が懐炉も準備され懐に入れての取材であった。私達は四十年目で、收容される前の晩、おにぎりを食べて歌を歌った一枚岩に腰かけたり、岩のくぼみの塩からい水を、水筒に入れたあの岩の上を再び歩くことが出来た。朝日新聞社の「ひめゆりの乙女たち」展や、その他ひめゆりに関する取材の時は、生き残った教え子に声をかけられて取材に応じられた。今井正監督の「ひめゆりの塔」の映画の試写会にも皆と一緒に先生を中心に感想を述べあった。

生き残った私達が集まる時、先生もお招きする、会の名前をお願いしたら。「生き抜きし娘らがつ





どへば 若空に 光さやけく照りまさり行く」と歌を作った。「わかぞら会。」と命名してくださった。④昭和六十年にわかぞら会の当時本科二年生の合同還暦祝いをした時、先生も御参加されほんとうに楽しい一時を過ごした。

⑤私達が友達三、四人で先生のお宅を訪ねると何時行っても歓待して下さった。話しは何時も戦争の事になり、私達がしゃべるまくるのをにこにこして聞かれ、時々「これは耳新しい事だ必ず書き残しておきなさい。」と口ぐせのように言われた。そろそろ帰りかけようとすると、先生は話題をもちかけ、つい長居をしてしまう。奥様も「皆さんが来ると機嫌がいいですよ。」と言われいろいろ御馳走をしてくださり、帰りは、お土産まで持帰るのが常であった。

先生が日本学士院賞、恩賜賞を受賞なされて間もなく、「ソ連の言葉学者が家に訪ねてこられた。」と話された。学問に国境はないと言うが大変な事だと私は思った。しばらくして県立図書館の宮城保氏が、「この賞は日本全国でごくわずかな人に与えられる賞ですよ。」と言った。それではるばるソ連の言語学者が来られたのだと思った。

ひめゆり平和資料館、資料館日より「第一〇号。」の先生の日記抄⑩（中曾根康弘防衛長官来島の翌日一〇月八日の日記）に先生はこう書かれてあった。「我々は摩文仁の断末魔の記憶をまざまざと思ひ浮かべる。世界平和の基点の島たらしめたいという、沖繩同胞の心の底からの悲願は全くふみにじられ、今度もまた、日本が国を守る、拠点、最先端に位置づけられようとしている。又百万の沖繩

県民に十字架をかけて、日本国家を守ろうというならば、断じて許されるべきではない。人道にはずれた防衛はやがて破壊を生む。沖縄人は決して、日本人のかかるエゴイズムは許さない。」先生の平和に対する深いお気持ちがよく表れていると私は思った。

ひめゆり平和祈念資料館がいよいよ建設されることになった時、先生は「ひめゆりパワーは大したものだ。」と言われたがそのひめゆりパワーを引き出されたのは仲宗根先生だと私は思っている。開館して五年八ヶ月で四百万人が入館した。今年ひめゆり同窓会が、終戦五十周年の節目で亡くなられた先生方、学友二百十九名を各学年で手分けて、御香料、弔文、線香持参で仏前廻りをしています。

生き残れる者に真実を語る勇気を与え亡くなった学友が未来永劫に平和の礎となれるよう位置づけ、日本全国の人々をはじめ世界の人々が、ひめゆりの塔に花を捧げ祈るようになったのは、仲宗根先生の御尽力だと尊敬申し上げ、感謝して居ります。